

参加のデザインによる水辺空間に対する住民の評価 についての考察

—都市近郊農村におけるワークショップを事例として—

A Study on Evaluation of Residents to an Irrigation channel Designed by Participatory Design Process

佐藤正吾* 吉田鐵也**

(*京都大学農学研究科)

I 研究目的

住民参加によるデザイン手法としての有効性は、デザインの質が高まり、整備された空間に対する人々の愛着を生むことが挙げられる。また、環境保全のプログラムとして、整備された空間への地域住民の管理意識を高める必要性と可能性が指摘されている¹⁾。農村の親水空間においては、計画段階から幅広い利用者を含む地域住民の参加を促すことで、管理意識が高まる効果も期待される²⁾。

どのような手法で計画されたものであれ事後評価を行うことは重要であるが、近年、住民参加による整備事例が急増しているのに対し、整備された空間への地域住民の評価を調べた事例は少ない。住民参加による計画・デザインの有効性を高めていく上では、とくに、参加のデザイン手法や合意内容との関係で住民自身の評価とその要因を調べる必要がある。本稿では、都市近郊農村である京都府加茂町瓶原地区における住民参加型ワークショップ（以下、「WS」とする）を事例として、合意内容に基づき一部実現した水路についての住民の評価の状況とその要因を、アンケート調査により検討する。

表1 登大路区の世帯数、混住化の推移

	1960	70	80	90	95
総戸数	54	54	66	67	67
総世帯員数	274	238			211
総農家数	33	30	29	20【13】	19【10】
専業	8	2	2	4【2】	4【0】
第一種兼業	11	8	8	2【1】	2【1】
第二種兼業	14	20	19	14【9】	13【9】
農家人口			123	92	
非農家数		24	37	47	

出所：世界農林業センサス集落カード、加茂町統計

注：単位は戸、人。【 】内は、うち販売農家。

II フィールド概要と調査方法

WSを行ったのは、隣接する2集落（登大路区＝67世帯、佛生寺区＝70世帯）である。2集落とも農家は1戸当たり耕地面積が狭隘で、兼業化と農業離脱が進んでいる。

WSは、用水「大井手水路」の水辺空間整備のため、1996年9月から1997年4月まで計8回開催した^{注1)}。水路は鎌倉時代に開削されたとされるが、老朽化で漏水、護岸の崩壊が起き、地元から改修の要望が出されていた。また、下水道が未整備のため、家庭排水が流入し、冬季の止水期には水質が悪化するという問題を抱える。

2集落のうち、登大路区では、水路本体と管理道（遊歩道）のデザインWSを行い、行政との合意に至った。以下では、このデザインWSを中心に報告する。世帯数等のデータを表1に、地図・工区図を図1に、WSフローを図2に示す。

整備は府営水環境整備事業の中で1996年度から行われている。登大路区でのWS合意内容は、1998年度末までに水路部分（L=130m）が整備さ

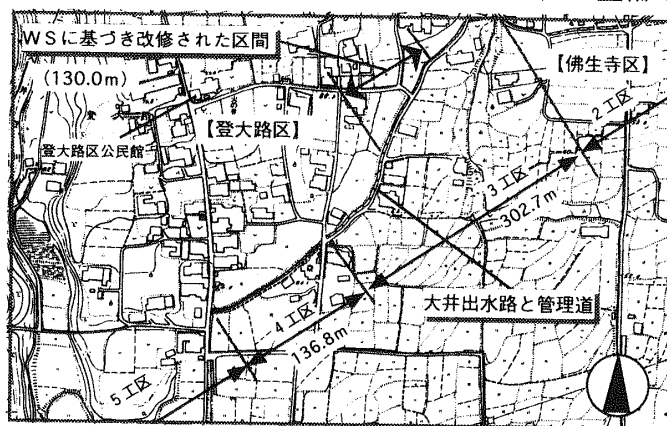


図1 登大路区地図、工区図

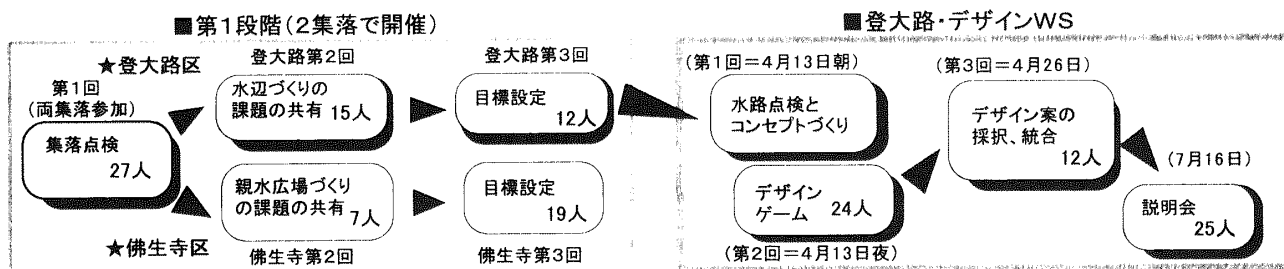


図2 WSのフロー

れた。しかし、上流工区（佛生寺区の1，2工区）が優先であること、管理道の用地買収の遅れなどにより、整備は途中の段階である。

このような経緯を受け、住民の水路に対する評価を調べる試みとしてアンケート（集票式）を2回実施した。1回目はWS終了後の1997年12月、2集落の全世帯主を対象に行った^{注2)}（以下、「WS後調査」とする）。2回目は、整備途中だが99年4月、登大路区の全成人を対象に行った（以下、「整備後調査」とする）。

本稿では、WSへの参加・関与の実態の属性に注意して、おもに整備後調査の結果から、地域住民の評価を、合意内容、デザインプロセスの観察との関係で検討する^{注3)}。

Ⅲ デザインWSの概要

登大路区におけるデザインWSの経過と合意内容の概要は次の通りだった。

【第1回】水路の点検とコンセプト作成

4班に分かれ、先行改修工区の全面改修された地点、登大路区の良い石積が残っている地点、コンクリート擁壁の地点などを点検項目に基づいて

点検した。これらの長所短所をふまえて、実現したい利用・機能、構造・形態、注意すべき制約条件などについて話し合った。

実現したい利用・機能について、(a) 生産（農業）のため、(b) 生活のため、(c) 生態系を保全するため、(d) 憩いや子どもの遊びなど親水のため、が4班中4班から出された。構造・形態は、(e) 生態系に配慮した構造、(f) 「洗い場」等の伝統的な付属施設の復活が4班中4班から、(g) 圧迫感のないよう擁壁の勾配を緩くすること、(h) 伝統的な石積（空石積工法）を残すことが4班中3班から出された。注意すべき制約条件としては、(i) 水の事故、管理道整備に伴う交通事故に対する安全性の確保、が4班中4班から、(j) 強度の確保、(k) 維持管理のしやすさ、(l) 生活排水対策とセットで整備する、が4班中3班から出された。

【第2回】デザイン・ゲーム 事前に、水路上流に残る伝統的な石積護岸工法や、町外にある水路と付属施設のデザインの事例を示し、護岸工法の違いによる自然度、強度、必要な用地の大きさ、維持管理の問題などについて説明を行った。水路のデザイン要素として、擁壁（切石積、玉石練積、野面石空積）、底面（鉄平石張、ゴロタ石張、砂利洗い出し）、管理道の舗装（パイプ、コンクリート）、植栽など基本的な

表2 水路本体のデザイン比較

	登大路・整備前	登大路・WS合意内容	先行改修区(1、2工区)
・右岸 ・左岸 擁壁	野面石空積 3工区：野面石空積+土羽 4工区：コンクリート(*)	野面石空積 野面石練積=深目地 コンクリート	玉石練積 玉石練積+笠石(御影切石) 一部スソのみコンクリート+鉄平石張
石材	地元産の御影石	現場の御影石を再利用	奈良県産の青石
底面仕上げ	コンクリート、一部砂利敷	コンクリート	コンクリート+鉄平石張
高さ /勾配	・右岸 1.0-1.5m/4-5分 ・左岸 3工区：0.6-1.0m/3-5分 4工区：0.9-1.5m/垂直	1.2-1.4m/5分 1.2m/3分	1.1-1.6m/1分、垂直 1.0m/垂直
幅	1.4-1.8m	1.3-1.4m	1.4-1.6m

※ 災害復旧事業による。耐用年数内のため、改修できない。



写真1 整備された水路

要素ごとのパターン (S=1/20) や、軽量粘土等の素材を用意し、4 班ごとに模型を作成した。4 案は、水路本体のデザイン要素に注目すると、①生物や修景に配慮し、自然的な石積を最大限追求するもの、②基本は自然的な石積だが、維持管理、用地、予算等の制約条件から、部分的に自然度の低い構造を許容するもの——の2パターンに大別できた。

【第3回】デザイン案の採択、統合 主催者側が模型 (S=1/10) 等を用意し、擁壁の2案、歩道と水路の平面的な位置関係などのオプションを示し、これらの長所、短所を説明。グループごとに是非や改善案を話し合い、改善案の出たデザイン要素につき投票を行い、統合を図った^{注4)}。

【説明会】最終案の説明と了承 事業主である京都府、加茂町、設計業者で調整のうえ、住民に最終案を提示して了承された^{注5)}。

内容は、①護岸を自然に配慮した野面石空積および野面石練積とし、石材は現状の地元の御影石をできるだけ再利用する、②底面は管理、構造、予算を考慮して修景せず、コンクリ打ちとする、③「洗い場」等の伝統的付属施設は現状または従来の位置に復活する、④新たに水路わきに遊歩道を設置する、⑤要望が多い水質改善の対策として家庭排水の多い地点に溜めマスを1カ所設置する——である。このうち水路本体について、登大路区の整備前/WSの合意内容/先行改修工区(佛生寺区)のデザインの比較を表2に、合意内容に基づいて整備された水路を写真1に示す。

IV アンケート結果

1 WS後調査の結果

対象数は登大路区=67人、佛生寺=70人であり、有効回答数104、有効回答率75.9%だった。この時期は、登大路区ではまだ整備はされておらず、一方、佛生寺区では、水路改修と管理道の整備(WS以前の計画による)が一部済んでいた。

ここではデザインプロセスへの参加・関与の違い(WSへの関わり方)によって、水路・水辺についての評価に違いが見られるか検討することが

目的であった。調査時点で水路や水辺のあり方について満足しているか(「非常に満足」から「非常に不満」までの5段階)を尋ね^{注6)}、住民の各属性による満足度の違いがあるか調べた(表3)。

住民の属性は、集落別、性別、年齢、職業、農家種別、水路への近接の有無(近接して住居や土地を持っているか否か)のデモグラフィック属性、およびWSへの関わりを示す参加・関与の実態を示す属性であった。

デモグラフィック属性のうち、満足度に明確な特徴が見られたのは、年齢別(壮年層ほど不満が大きい)、次いで、集落別(登大路区で不満が大きい)であった。年齢別で満足度に違いがみられたのは、自由意見等から下水道整備の遅れに対して

表3 WS後:各属性の構成と満足度

デモグラフィック属性			満足度					
	人	構成比	A	B	C	D	E	有意水準
登大路	56	53.8%	3	5	18	15	12	*
佛生寺	48	46.2%	3	8	20	6	6	
男	78	75.0%	6	9	28	15	14	
女	26	25.0%	0	4	10	6	4	
49歳以下	22	21.2%	0	2	9	8	3	**
50歳代	36	34.6%	1	1	14	6	11	
60歳代	32	30.8%	3	4	14	6	2	
70歳以上	14	13.5%	2	6	1	1	2	
会社	40	38.5%	1	1	19	10	7	
農業	14	13.5%	2	2	5	2	0	
自営業	16	15.4%	1	3	4	3	5	
無職・その他	34	32.7%	1	7	10	6	6	
専業農家	4	3.8%	1	0	2	0	0	
兼業農家	19	18.3%	3	2	8	3	2	
自給的農家	31	29.8%	1	3	9	5	9	
非農家	48	46.2%	0	8	19	12	7	
居住10年以上	95	91.3%	5	11	35	18	18	
居住10年未満	7	6.7%	0	2	2	3	0	
近接	46	44.2%	5	5	18	5	8	
近接せず	58	55.8%	1	8	20	16	10	
参加・関与の実態に関する属性								
w1	45	43.3%	4	5	14	12	7	**
w2	13	12.5%	1	1	6	1	3	
w3	16	15.4%	0	1	9	3	3	
w4	8	7.7%	0	1	2	2	2	
w5	8	7.7%	0	2	3	2	0	

注1: 無回答を除く。A~Eの数字は人数。

注2: 満足度は、A=非常に満足、B=やや満足、

C=どちらともいえない、D=やや不満、E=非常に不満

注3: * 5%水準で有意 ** 1%水準で有意

(Kruskal-Wallisの順位和検定による)

【カテゴリーの定義】

会社=会社員・公務員・団体職員
 農業=主たる職業が農業の人
 兼業農家=兼業農家のうち自給的農家を除く農家(販売農家)
 自給的農家=経営耕地が30a未満かつ年間販売額30万円未満の農家
 近接=水路に近接して住んでいるか、近接する土地を所有
 w1=WSに参加したことがある
 w2=家族や知人から開催を聞き、関心を持ったが参加しなかった
 w3=広報、ちらして開催を知り、関心を持ったが参加しなかった
 w4=WSの開催は知っていたが、関心はなかった
 w5=開催していることを知らなかった

壮年層に不満があることが推測された。集落別に満足度に違いがみられたのは、佛生寺区では先行改修のため満足度が大きかったのに対し、登大路区では、合意内容が未整備の段階で、相対的に不満が大きかったためと考えられる。

WSへの参加・関与の別は、満足度の分布に有意な特徴が見られた。参加者(w1)、関心層(w2、w3)という参加・関与の程度が強い人ほど、不満の傾向が有意に強いことがわかる。

2 整備後調査の結果

2-1 整備後調査の方法 整備途中で行ったのは、完了時期がはっきりしないこと、整備状況の報告や今後の意向を聞くことを兼ねたためである。中間的な調査として、設問項目が煩雑にならないよう配慮した。調べた属性は、WS後調査で満足度に有意な差が見られた性別、年齢、職業などのデモグラフィック属性、および、WSへのかかわりを示す参加・関与の実態を示す属性(カテゴリーはWS後調査に同じ)である。

設問は、①整備前や先行改修区と比べた、整備箇所の水路のデザインへの満足度(「良い」、「どちらかというといい」、「どちらかという悪い」、「悪い」の4段階)②評価の個別理由への支持(賛成・反対)であった。

表4 整備後:各属性の構成と見た人数

デモグラフィック属性			整備箇所を	
	人	構成比	見た人	割合
男	64	48.1%	56	87.5%
女	69	51.9%	49	71.0%
20歳代	15	11.3%	12	80.0%
30歳代	9	6.8%	7	77.8%
40歳代	21	15.8%	12	57.1%
50歳代	41	30.8%	37	90.2%
60歳代	21	15.8%	20	95.2%
70歳以上	26	19.5%	17	65.4%
会社	47	35.3%	37	78.7%
農業	12	9.0%	11	91.7%
自営業	16	12.0%	12	75.0%
無職・その他	58	43.6%	45	77.6%
近接	48	36.1%	42	87.5%
近接せず	84	63.2%	62	73.8%
参加・関与の実態に関する属性				
w1	39	29.3%	39	100.0%
w2	19	14.3%	13	68.4%
w3	27	20.3%	22	81.5%
w4	19	14.3%	14	73.7%
w5	27	20.3%	15	55.6%

注1: 無回答は除く。

注2: 「見た人」は各カテゴリーのうち見た人数。

2-2 回答状況 回答状況は、対象数166に対して回収数136(回収率81.9%)、有効回答数133(有効回答率80.1%)であった。また、評価を聞くにあたって、WSに基づき整備された箇所を見たかどうかを尋ねたが、見た人は105人、有効回答者の78.9%であり、分析に耐えると判断した。

133人の属性を第4表に示す(カテゴリーの定義は表3に同じ)。参加・関与の別をみると、w1(Ws参加者)の割合は全体の29.3%であり、WS後調査(世帯主を対象)での43.3%に比べて小さい。WSでは、世帯主が世帯代表として参加していたケースが比較的多かったためと考えられる。

整備箇所を見た人の割合を、属性別にみると、全体の割合(78.9%)に比べて、40歳代、70歳以上、w5(Ws開催を知らなかった)は小さく、逆に、50歳代、60歳代、農業、w1(=100%)が大きいことなどが目立つが、おおむね、あらゆる属性の大部分の人が整備箇所を見たことになり、地域住民からの認知度は高いといえる。

2-3 整備した水路への評価

(A)総合評価 以下では、整備箇所を見た人のうち、総合評価を答えた104人について検討する。総合評価の属性別の回答を表5に示す。

表5 整備後:整備箇所に対する総合評価

デモグラフィック属性		整備箇所への総合評価				
	人	A	B	C	D	p値
全体	104	30	60	9	5	
男	56	14	35	3	4	0.4156
女	48	16	25	6	1	
20歳代	12	4	8	0	0	0.5279
30歳代	7	1	5	1	0	
40歳代	12	2	6	3	1	
50歳代	37	12	20	3	2	
60歳代	20	6	12	1	1	
70歳以上	16	5	9	1	1	0.1940
会社	37	7	25	3	2	
農業	11	4	6	0	1	
自営業	12	2	7	2	1	0.4898
無職・その他	44	17	22	4	1	
近接	42	10	25	3	3	
近接せず	62	19	35	6	2	0.1189
参加・関与の実態に関する属性						
w1	39	13	20	4	2	
w2	13	4	8	1	0	
w3	21	6	15	0	0	
w4	14	2	6	3	3	
w5	15	4	10	1	0	

注1: 無回答を除く。A~Dの数字は人数。

注2: 総合評価は、A=良い、B=どちらかというといい、C=どちらかという悪い、E=悪い

注3: p値はKruskal-Wallisの順位検定で χ^2 近似

サンプル全体では、「どちらかという悪い」「悪い」を合わせて14人(13.5%)であった。WS後調査での満足度のよう、中間値(5段階での「どちらでもない」)を設けなかったため、「どちらかというといい」が中間値に近い分布をしたと考えられるが、「良い」(30人、28.9%)だけでも、否定的な評価全体を上回っており、全体に肯定的な評価であ

るといえる。

属性別にみていくと、デモ属性、参加・関与の別ともに、有意な差が見られるものはなかった。

最も有意確率が小さかった属性は、WSへの参加・関与の別であった。統計的に十分有意であるとはいえないが、属性の中では最も分布に特徴がある。具体的には、参加者（w1）や知人や広報などで情報を知り関心を持った層（w2、w3）に「良い」が多く、逆に、関心を持たなかった層（w4）に比較的否定的な評価が多い。これらのことから、参加・関与の程度が強いと、評価が肯定的という傾向が弱いながら認められる。ただし、w1の中に否定的な評価もあり、合意内容の個々人のイメージが整備箇所の仕上がりとは異なっていたことへの批判、失望等があると考えられる。

(B)評価の要因 上でみた各評価段階の人が、②の各々の要因（の候補）に対して、どれだけ賛成または反対しているか、評価別の分布を調べる（表6の左）。

設問項目の一部は、WSでの話し合いの内容に関連付けて設けた。「強度が増した」はデザインWS第1回で話し合われた(a)(j)の意見に対応する。同様に、「自然に配慮」は(c)(e)、「昔の景観に配慮」は(g)(h)、「管理難しい」は(i)(k)、「石積の意味ない」は(c)(e)(h)(l)の意見に対応する。石積に関しては、水質改善にも役立つという観点で空石積工法が採用された経緯がある。

また、デザイン内容だけではなく、整備の進捗

状況、合意内容のイメージが反映しているかどうかの認識でも総合的な評価は変わる可能性があると考えられ、これらも設問項目に含めた。

「場所に合わない」、「内容実現」、「自然に配慮」、「管理しにくい」、「景観に配慮」までが1%水準で、「整備が遅い」までが5%水準で、総合評価に影響する重要な要因となっている。つまり総合評価が肯定的な人は、「場所に合わない」や「管理しにくい」とは考えておらず、「内容実現」、「自然に配慮」、「景観に配慮」したと考えているなどの特徴が現れた。

「強度増した」は有意でないが、これは、整備から時間が経っており、多くの人にとって明確な判断材料がなかったためと思われる。

次に、WSへの参加・関与の別と、個別要因の関係を調べた(表6の右)。「景観に配慮」「内容実現」「整備が遅い」は総合評価の別では有意であったのに、参加・関与の別では有意でない。参加・関与の別によってこれらの項目への人々の態度はさほど変わらないことを示す。「内容実現」については、w1や関心層に「実現」していないと考える人がw4と同様に多い。「整備が遅い」と思う人がw1に多いことと関係していると考えられる。

逆に、総合評価の別では有意ではなかったが、参加・関与の別では有意だったのは、「石積意味ない」である。参加・関与の別ではw4は「意味ない」と考える人がほとんどである。w4の賛成・反対の分布をみると、最も偏っているのは「石積

表6 整備後：総合評価と個別要因、参加・関与の別との関係

【設問】「そう思う」か「そう思わない」かの どちらかを選んでください。	整備箇所への総合評価						参加・関与の実態に関する属性					
	個別要因	A	B	C	D	有意水準	w1	w2	w3	w4	w5	有意水準
・改修されて漏水や崩壊のおそれ がなくなった(＝強度増した)	強度増した	22	39	4	1	**	26	10	16	5	8	
	そう思わない	5	21	5	3		12	3	4	9	6	
・この場所に合わない風景 になった(＝場所に合わない)	場所に合わない	3	7	3	4	**	5	0	1	9	1	**
	そう思わない	25	51	6	0		33	10	20	5	14	
・水路の他の区間と比べて、自然に 配慮している(＝自然に配慮)	自然に配慮	23	42	4	0	**	26	9	15	5	12	*
	そう思わない	5	16	4	5		13	2	5	9	1	
・水路の他の区間と比べて、昔の景観 に配慮している(＝景観に配慮)	景観に配慮	23	36	4	1	**	29	7	13	5	8	
	そう思わない	3	22	4	4		9	2	7	9	6	
・以前と比べて、管理がむずかしく なった(＝管理しにくい)	管理しにくい	5	8	5	3	**	7	1	3	7	2	*
	そう思わない	21	48	3	2		31	8	18	6	11	
・住民自身が話し合ったデザインが ある程度実現した(＝内容実現)	内容実現	21	31	1	0	**	23	6	9	5	9	
	そう思わない	4	18	6	5		16	3	8	5	2	
・水質がわるいならこの石積みの意味 があまりない(＝石積意味ない)	石積意味ない	10	25	8	3		20	4	5	11	5	*
	そう思わない	14	28	1	1		18	3	14	2	7	
	整備が遅い	17	47	8	2	*	30	11	13	8	10	
	そう思わない	11	10	1	3		9	0	7	5	4	

注1: 無回答を除く。A～Dの数字は人数。

注2: 総合評価はA=良い、B=どちらかというと良い、C=どちらかというと悪い、E=悪い

注3: * 5%水準で有意 ** 1%水準で有意 (Kruskal-Wallisの順位和検定による)

意味ない」であり、w4はもともと水辺の計画に興味がないために、空石積への理解が不足、もしくは反発しているとも考えられる。

V まとめ

第1に、参加のデザインを経た整備箇所は、年齢、職業等の別によらず、住民各層にわたって認知され、評価は肯定的であった。今回の事例では、農業用水の水辺がテーマであったが、参加のデザイン手法が、職業別、水路への近接の有無といった利害関係にかかわらず、地域の各層の人に受け入れられるデザイン内容を実現するために有効であったと考えられる。

第2に、整備後の評価を参加・関与別にみると、WS参加者や関心層ほど、整備箇所への評価は高い。評価の対象、サンプル、評価尺度ともにWS後調査とは異なるため単純な比較はできないが、WS後調査では、参加・関与の程度が強い人ほど不満の傾向が有意に強かったのに対し、整備後調査は、合意内容が反映されるという認識が高まることを通じて、整備空間への評価を肯定的に変え、ひいては整備空間への愛着を生む可能性を示す。

問題点として、第3に、WS参加者は期待が大きいくらいに、イメージと違う仕上げであったり、整備の進捗状況の遅さに否定的な反応を持ちうる。今後の課題として、施行状況のチェック、住民への説明、業者へのフィードバックなどの施行段階での適切な手続きの必要性を示す。

第4に、空石積の意義がWSに関心を持たなかった人には理解されていないように、デザイン内容の個々の理解、受け止め方には住民によって差がある。デザインの質と評価を高めるために、よ

り効果的な相互の学習や周知の方法が必要である。

以上、整備箇所への評価を検討したが、住民参加型WSの手法としての有効性と、課題が確認できた。ただし、本調査はあくまでも中間時点での概括的な評価である。整備完了後の住民意識、利用観察なども含め長期的な事後評価を行う必要がある。

【注】

- 1) 主催は社団法人農村環境整備センター、京都府、加茂町。企画・運営、ファシリテーションは町職員と筆者らの共同。
- 2) 設問はⅠ.水辺空間に関する景観・機能評価、およびⅡ.まちづくりに対する評価・意向。Ⅱは文献3を参照。
- 3) 親水空間の景観への評価構造と評価者のデモグラフィックな属性との関係は知見が蓄積されつつある。例えば文献4。
- 4) 過剰な要望でなければできるだけ意見を反映しようというスタンスだったため、事業予算の範囲内で材質や工法を選択する手続きは特にとっていない。
- 5) WSの各回の意見のまとめと最終案への反映の仕方、平面図、断面図、パースをプレゼンテーションした。その後、意見交換を行い、参加者の賛同を得た。
- 4) 満足度のほか、水路や水辺の機能・景観にとって重要な要因(25カテゴリー)は何かを聞いた。要因間の構造や満足度と要因との関係に際立った特徴はなく、有用な情報は得られなかった。

【参考文献】

- 1) 浅海義治(1997):「創造的な住民参加を目指して」ランドスケープ研究、vol.60、No.3、pp.221-225。
- 2) 千賀裕太郎・和気芳道(1986):「農業水利施設の親水利用と維持管理について」農村計画学会、vol.5.No.3、pp.58-68。
- 3) 佐藤正吾・吉田鐵也(1998):「都市近郊農村住民のまちづくりへの意識にみる住民参加型ワークショップの有効性と課題」都市計画学会学術研究論文集、Vol.33、pp.715-720。
- 4) 大田征六・長堀金造・赤江剛夫(1996):「斐川町地区用水路の住民による景観評価」農村計画学会誌、Vol.14、No4、pp.38-48。

Participatory Design Process has recently been more and more important in the light of effective design and residents' acceptance. The purpose of this study is to examine the post-occupancy evaluation of residents to an irrigation channel repaired by the agreement in participatory workshops for a project to repair attractively the channel and the area along it, in an urban-fringe settlement in Kamo-cho, Kyoto Prefecture. The questionnaire survey and analysis show that the general residents' evaluation to the channel is commonly favorable beyond the demographic attribution, and the workshop participants' evaluation is more favorable than the other residents one.